

日本活断層学会 2019 年度秋季学術大会開催報告

日本活断層学会 2019 年度秋季学術大会実行委員会

2019 年 10 月 5 日（土）・6 日（日）、東京大学地震研究所および農学部弥生講堂（東京都文京区）において、日本活断層学会 2019 年度秋季学術大会が開催された。参加者は、会員 78 名・非会員 22 名・学生 5 名の、計 105 名であった。一般研究発表では、14 件の口頭発表と 14 件のポスター発表が行われた。加えて、シンポジウム「技術革新がもたらす活断層研究の新たな展開」、2019 年度フォトコンテストの作品展示、また各賞の表彰式、懇親会も行われた。

5 日（土）は午後からの開催で、地震研究所セミナー室にて一般研究発表（口頭）が開催され、9 件の発表と質疑応答が行われた。それに続いて一般研究発表（ポスター）がコミュニケーションラウンジで開催され、14 件の発表があり、活発で熱心な議論が各所で展開された。また、2019 年度フォトコンテストの作品展示も 5 日（土）の開場から 6 日（日）の午前中にかけてポスター発表と同じコミュニケーションラウンジにて行われた。今回はこれまでの受賞作品についても再度展示が行われた。



左：一般研究発表(口頭)、右：一般研究発表(ポスター)の様子

5 日(土)の夕方には、ポスター発表に引き続き地震研究所コミュニケーションラウンジにて学術交流会が開催され、48 名が参加した。須貝俊彦副会長の司会のもと、実行委員長、佐竹健治会長の挨拶に続いて熊木洋太前会長による乾杯の発声を受け、日比谷松本楼の洋食を食しながら歓談した。宴の途中、学会賞を受賞した国土地理院より山中崇希会員、産業技術総合研究所より吾妻崇会員と、受賞論文の著者の一人である鈴木康弘会員からお言葉を頂いた。最後に 2020 年大会実行委員会から安江健一会員の挨拶、近藤久雄行事委員長の締めで散会となった。



懇親会の様子

明けて 6 日（日）の午前には地震研セミナー室において一般研究発表(口頭)が開催され、6 件の発表と質疑応答が行われた。講演終了後、学会賞・論文賞・若手優秀講演賞および 2019 年度フォトコンテストの表彰式が開かれ、佐竹健治会長から受賞者に賞状が授与された。学会賞は、「活断層の学校」の共同主催を通じた知識・技術伝承や若手研究者育成への積極的な取り組みが評価され、国土交通省国土地理院・国立研究開発法人産業技術総合研究所地質調査総合センター・国立研究開発法人防災科学技術研究所が受賞した。論文賞は、活断層研究 48 号に掲載された「2016 年熊本地震における益城町市街地の地震断層－変動地形学的意義と建物被害への影響」（著者 鈴木康弘・渡辺満久・中田 高 の各氏）が、益城町市街地の地表地震断層の詳細な記載と建物被害の関係を議論した点が評価され受賞した。若手優秀講演賞は、「GNSS 観測による伊豆半島北東部の剪断変形」（道家涼介氏）が、測地学的データに基づくひずみ蓄積過程と地形・地質情報に基づく活断層との関係を総合的に論じた点が評価され受賞した。



左：学会賞受賞の代表者、中：論文賞受賞者、右：フォトコンテスト入賞者

6 日（日）の午後は会場を農学部弥生講堂一条ホールに移し、シンポジウム「技術革新がもたらす活断層研究の新たな展開」を一般公開で実施し、市民を含め 90 名を超える参加を得た。シンポジウムでは、1995 年兵庫県南部地震を契機とした全国的な活断層の調査研究から四半世紀近くが経過し、活断層研究を含む地球科学の技術革新を踏まえて、活断層研究に適用可能な最新の調査・観測・解析技術と適用例、またその課題や今後の発展について幅広い議論を行うことを目的とし、実行委員会を中心に学会内外の講演者に講演を依頼した。題目・講演者は以下の 8 件である（いずれも招待講演、敬称略）。

「干渉 SAR による地殻変動マッピングとお付き合い地震断層」（藤原 智）、「UAV-SfM による活断層分野の教育研究および地域社会への貢献」（内山庄一郎）、「宇宙線生成核種を用いた活断層研究の紹介と今後の展望について」（白濱吉起）、「炭素 14 年代法による年代測定-日本版較正曲線の未来-」（坂本 稔）、「海底活断層調査における技術革新

「時間・空間分解能の向上と高分解能三次元探査」（大上隆史）、「地下構造可視化に向けた地震探査技術の進展と活断層研究への貢献」（阿部 進）、「三次元有限要素法による断層変位計算―糸魚川―静岡構造線断層帯を対象として―」（竿本英貴）、「2011年東北沖地震による上盤プレート内の震源断層におけるクーロン応力変化のモデリング」（橋間昭徳ほか）。司会を務めた遠田晋次・近藤久雄両会員の円滑な進行で有意義な意見交換が行われ、今後の活断層研究の方向性を模索することができた。会場ではシンポジウムの方向性などについてのアンケートが実施され、結果は今後の運営に活用される。



シンポジウムの様子

本大会での新たな試みとして、一般研究発表およびシンポジウムの参加者のうち、希望者に対して CPD ポイントの認定を行い、延べ 50 名に対して認定証の配付を行った。特に実業界や研究機関からの参加者にとりインセンティブとなると考えられ、広く学会・シンポジウムへの参加を促すために継続的な実施が望まれる。

最後に、シンポジウム講演者および参加会員の皆様、準備・運営にご尽力頂いた学会事務局および関係委員会の皆様、アルバイトを引き受けて頂いた東京大学の学生・事務支援員および会場関係者をはじめ、関係各位および機関に深く御礼申し上げます。